識字と読書——リテラシーの比較社会史 ■ 目次 ■

序章　識字と読書——その課題と方法——　松塚俊三・八鍬友広　1

リテラシーとは？　2
方法としての識字と読書　5
比較史の視座　8
本書の構成　11

第Ⅰ部　国家・社会の編成と文字

第1章　宗教改革期のドイツにおける読書・コミュニケーション・公共性——《宗教改革的公共性》をめぐって——　蝶野立彦　19

第1節　宗教改革期の公論形成のメカニズム——「市民的公共性」と「宗教改革的公共性」との相違——　21

第2節　非識字層への宗教改革運動の拡大・浸透を支えたコミュニケーション手段——スクリブナーの研究を手がかりに——　25

第3節　中・近世ドイツの「公共」観と宗教改革運動における民衆語の役割　31

第2章　統治のための識字——植民地期インドの行政管理と統計——　46　三瀬利之

第1節　大英帝国のインド支配と文書統治　50
第2節　行政管理のための人口統計　55
第3節　統治のための識字——その社会史的意義——　62

第3章　明治期日本における識字と学校——国民国家とリテラシー——　69　八鍬友広

第1節　明治期における自署率調査　71
第2節　山口県玖珂郡における自署率と社会的諸要因　73
第3節　岡山県における自署率と社会的諸要因　80
第4節　世代間継承から学校による継承へ　85

第Ⅱ部

民衆世界と読書

第4章　日本近世上層町人における〈家〉の教育　99
横田冬彦

第1節　問題の所在と分析の方法　99
第2節　幼児期（又三郎、一～四歳）　104
第3節　少年期（捨二郎、六歳頃～一一歳頃）　108
第4節　青年期（六三郎・又二郎、一三歳～二二歳）　113

第5章　日本近世における出版と読書　131
――読者層の拡大と出版の変移――
長友千代治

第1節　寛永期の整版本出版　131
第2節　元禄期三世代目の出版　136
第3節　享保期より四世代目以降の出版　146
第4節　四民の学習　150

第6章　啓蒙期パンフレットとその読者層
——『ウィーンの小間使い娘』を中心に——　156　山之内克子
第1節　ヨーゼフ二世期のパンフレット　158
第2節　『ウィーンの小間使い娘』とその反論文書　161
第3節　読者としての「小間使い娘」　171

第7章　読書する自画像
——建国期アメリカにおける巡歴説教師の自伝を読む——　185　山田史郎
第1節　信仰の自由と活字の戦略　185
第2節　荒れ野の書物　190
第3節　書物との格闘　200

第8章　一九世紀末ドイツの家庭医学書の「科学化」
——ルッツェ著『ホメオパシー教本』を中心に——　214　服部　伸
第1節　「学ぶ患者」と教科書　214
第2節　『ホメオパシー教本』の疾病記述　221

第3節　『ホメオパシー教本』に表れた女性の身体　227
第4節　医学の科学化とホメオパシー家庭医学書　233

第Ⅲ部　交錯する文字世界

第9章　明治前期における書籍情報と書籍流通
——信州北安曇郡清水家の書籍購入と兎屋誠——　243　鈴木俊幸
第1節　新聞の書籍情報　244
第2節　兎屋書店からの書籍購入　253

第10章　読み書き教育効率化と標準発音普及を目指して
——一九世紀後半イギリスの綴り字改革論——　273　山口美知代
第1節　ロンドン学務委員会の請願運動　276
第2節　表音式綴り字と読み書き教育の効率化　282
第3節　発音の標準化と綴り字改革論　288

第11章　セクシュアル・リテラシー——戦間期のイギリス労働者階級と性——　298　松塚俊三
第1節　セクシュアル・リテラシーをめぐる二つの文化　301
第2節　中産階級フェミニストのバース・コントロール論　309
第3節　労働者階級の性的無知　313
第12章　口述文化と文字世界——シティ・オヴ・ロンドンに見られた労働文化の伝達——　325　酒井順子
第1節　口述の労働文化　327
第2節　変容する金融世界と労働者　331
第3節　金融業事務労働者たちの語った口述文化　335
あとがき　356
完結にあたって　359
人名索引　iii
事項索引　vii